

調査と研究①

東北アジア諸国の長期的発展可能性 (前編)

Longrange Growth Potentiality of North –
East Asian Countries

河野 博忠*

1. 総論

1) 経済体制論争の現代的帰結

最近におけるソビエト連邦、東欧諸国の経済機構の激変、崩壊はまさに瞠目すべきものである。筆者が36～37年前に経済学部の学生であった頃、経済体制論 (*Treatise on Economic System*) ないし経済計算論 (*Theory of Economic Calculation*) として資本主義体制 (Capitalist system) と社会主义体制 (Socialist system) との効率性論争がLudwig Edler von Mises、Friedrich August von Hayek 等とOscar Richard Lange、Abba Ptachya Lerner 等との間でさかんにくりひろげられた。

Misesは「生産・消費を合理的に営むためには価格計算の不可避なことを主張し、これを否定する社会主义はついに収拾のつかない混乱を招くだけであるとして、社会主义の不可能であることを解き」([1] p. 269)、これに対してLangeは社会主义においても価格のパラメータ的機能 (*parametric function of prices*) の必要性を認めるが、ただし生産と消費のうちの後者だけに認め、生産手段については国有化のもとで、消費と

労働についての自由価格に依拠して当局がパラメータ機能に代わって試行錯誤 (trial and error) によって価格決定することにより生産手段の国有化という社会主义の基本条件を損なうことなく目的を達成するという自由制社会主义 (*libertarian socialism*) あるいは競争的社会主义を提倡して論争がなされたのである。この論争についての当時の評価、感想は5分5分ないし、理論的には、社会主义体制の方が若干優れていそうであるという印象を与えるものであった。

戦後40年間の東西両陣営の経済発展はこの論争の社会科学的大実験であったとさえいえよう。結果はMises、Hayek等が予言、推論した通り、この市場価格の分権的パラメータ機能なしには財・サービスの適正な配分が機能しなくなってしまったのである。数ヵ月前のマルタ島におけるPresident of the USSR、Mikhail S. Gorbachevの潔い社会主义経済体制の敗北宣言は軍事力に関する外的敗北ではなく、経済システムの内的なそれに根ざしたものであったと言えよう。とにかくこの平和な世の中において「とかく買うものがない。肉も衣料も石鹼も…」([11] 下段)などということは言語道断なのである。明らかに経済の枠組、経済体制の失敗と断定せざるを得ない。

このようにソ連邦、東欧の経済が音をたてて崩

*筑波大学教授

壊したことにより、今や世界には「市場経済化」という一元的な経済政策(economic policy)しか存在しなくなったのである。左派勢力にとってこれまで理想の規範の権現とみられてきた本尊そのものが著しく迫力のないものになってきているのである。

実は、このようなソ連邦、東欧の経済体制の劇的变化がなかったとしても、実質的には数年前ないし10年前から世界各国の経済政策は「市場経済化」、「規制緩和」、「人的組織の活性化」、「活性化誘因の発掘、顕現化」に向かって大河のごとく流れはじめていたのである。

中華人民共和国の輸出加工区としての「経済特区(経済特別区)」、「経済開発区」、「沿岸開放地帯」の指定、「准海経済区」の設置、等の特例先行([34] p. 569)、および農業に関しては「農業生産責任制」の導入([34] p. 567)、また、ソ連もシベリア、沿海州にこの経済特区の大々的な創設を急いでいること(ナホトカでの「経済特別区」の第1号名乗り[11])、また農業生産での「農業集団請負制」の導入、「自留地」の容認([34] p. 599)、さらに自由主義諸国の国営企業の民営化、分割化に世界の経済政策の潮流が端的に現われている。

それではなぜこれほどまでに社会主義経済体制を、40年前の見通しとはほど遠く徹底的に崩壊せしめたのか。社会主義経済体制にも長所はあったのである。たとえば、現在の日本の農業問題(コメ問題)の解決には、1つの山村、盆地の50~100軒の農家の農地を集団化して出来うれば株式会社化して生産性を倍増(生産費を1/2ないし1/3に減少、合理化)する以外に方策なしという崖縁に立たされているのであるが、自由主義体制の今の日本ではこの集団化は非常に困難な課題なのである。ところがかつてソ連邦において農業の集団化は2年間で全農地の2/3について達成されたようだまさに驚異的な効率的処理実績である。コルホーズ(集団農業)はソ連全農地の23.8%、ソフホーズ(国営農場)は75.5%の農地で経営している([34] p. 599)。

また、一時期重厚長大型の重化学工業全盛時代毎年率10%を越える成長を達成していたようである。ではなぜ現在のような凋落の運命をたどるようになってしまったのか。それはサービス経済化、高度情報化社会の到来に呼応してのマイクロ・エレクトロニクス革命に遅れをとってしまったからである。これはソ連型の中央集権的な財の調達・割当て方式では、たとえどんなに官僚機構が整備されたとしても限界があり、特に中間財としての部品の入手・割当てが官僚機構の強い弊害により全く作動しなくなってしまったのである。重厚長大型の石炭、鉄鋼、電力といった産業の場合には中央集権的な財の調達・割当て方式の欠点がいまだそれほど顕現化しなかったのである。

しかし、軽薄短小型の産業が主流となり、これらの財の配分機構となると分権的な市場経済の中での各個人、各企業の全面的な自由に委ねざるを得ないのである。半導体(超LSI)の部品をいちいち当局に請求伝票を切って何週間、何ヶ月も待っていたのでは経済効率からほど遠いものになるのは理の当然といえよう。つまり込み入った部品の調達は中央集権体制に適さないのである。分権的水平分業によってはじめて適正に処理されるのである。

もう1つの重要な点は、分割民営化されない(自主性の発揮と個人の利潤が認められない)ことにより創意工夫が認められず、取り入れられないことである。これについては全く逆に日本の工業製品の優秀さは全ブルーカラーの整然とした効率的、能率的生産工程への参画と、創意工夫の最大限の汲み取り、組み込みによる技術進歩率の高度化によるものと規定しても過言でないほど徹底しており、成功しているのである。

1億人のブルーカラーのほとんどが生かされないまま、時間に拘束されるだけの勤め方をしているのと、1億人がほとんど企画・製品開発部員のごときブルーカラーとでは生産効率、生産性に歴然たる差異が生じてくるのはけだし当然のことと言えよう。

ソ連において、「自留地」は全農地面積の1%

から 2.6%弱しか占めているに過ぎないにもかかわらず、ジャガイモの総生産の61%、野菜の29%、肉の29%、牛乳の29%、卵の34%ものシェアとなっている（1978年）ことがすべて物語っている（[34] p. 599）。つまり生産の効率化には如何に個人の自主性の発揮と個人利益のインセンティヴ（誘因）が重要かということである。

これからの経済政策としての市場経済化（自由化）はそのための枠組なのである。大戦争がない限り領土の広大さなど効率的運用が伴わない限り何の意味もない。台湾、香港、シンガポール、大韓民国の高度経済成長は理の当然であるといえる。領土が広大であれば生産系社会資本と生活系社会資本との双方を首都地域と同レベルに整備するという課題の達成さえ至難の業なのである。たとえば日本はいまや世界に冠たる経済大国といわれ、なるほど民間企業は充実している。しかし地方の全国津々浦々まで社会的基盤の整備が行き渡るのは不定の将来まで引き延ばされよう。まして言わんや発展途上国においてはなおさら困難であろう。

2) 職業倫理の基礎理論としての Protestantism vs. Confucianism

経済体制論争は社会主义体制 vs. 資本主義体制についてばかりでなく、実は広い意味で資本主義体制内部においても存在する、ないしこれこそ重要なのである。

資本主義経済体制において職業倫理は長い間新教の教義（Protestantism）にその基礎をおいて説明されてきたのであるが、最近USAの累積債務の増大に端的に示されているように、蓄積しないで消費、あるいは勤勉の結果として富が蓄積されると直ちに消費という性向がみられるが、一方ひるがえって東洋に目を移すと大韓民国、中華民国台湾省、香港、シンガポール等のNIES（新興工業経済群=Newly Industrializing Economies）の驚嘆に値する高度成長をもたらし、勤勉の成果として蓄積が達成されても勤勉・刻苦勉励の手を緩めないという顕著な特性がみられる。このよう

な精神構造の背後に存在すると考えられるのが儒教主義（Confucianism）の職業倫理といわれている。

最近、大石泰彦“勤儉貯蓄の精神構造”「生活経済学会会報」[9]によって、プロテスタンティズムとりわけCalvinism の職業倫理と儒教特に日本でのその一派の流れを汲む石門心学の職業倫理とがきわめて類似している点の考証がなされて、これらの類同性の原理論的正しさが確認されている。

しかし、今後この両者の最終的な成果にはかなりの違いが出る可能性もあると考えられるのである。 Calvinismと石門心学の職業倫理がほぼ同じとしても、日本も含めてNIESが欧米なみに蓄積が充分達成されると結局、怠惰が始まるのか、それとも勤勉であり続けるのか断定はできない。要は、国民の大多数にその教義が身についているといえるのか、あるいは一部の企業家のみについてしかいえないのかである。現在における日本、NIES諸国の勤勉と、ヨーロッパの怠惰、USAの過消費との違いはこのように、勤勉が国民大多数の風土、血肉となっているか否かの違のように考えられる。

3) 東北アジア諸国の長期的発展可能性

蓄積の成熟段階に到達した時、日本およびNIESも結局欧米と同じく勤勉が怠惰へと転化するのかどうかは不明としても、ここ当分、すなわち21世紀の4半世紀まではおそらく蓄積がなされようとも勤勉が鈍化することは無いであろうと想定する。この前提が揺らぐ場合には21世紀前半における東北アジアの時代は到来しないであろう。しかし、幸い東北アジアの諸民族の現在の活力しかもそれが儒教主義によってこれまで2000年にわたって民族のほとんど全員、全体が培われた成果としての活力であることが考証されるとき、東北アジアの最適成長が夢ではない可能性としてクローズアップされるのである。

このような精神的バックボーンが保証されると、これを前提として次に、東北アジアの長期的

発展策が処方されるのである。それは中国を含めた、ないし中国を中心として日本、韓半島、シベリア等の諸地域が地域内での分業に基づく生産効率の達成、経済成長、そして国際的な産業内での水平分業による諸国の同時最適成長にむかって経済成長を加速化してゆくことである。

それには地球規模の巨大プロジェクトの導入によって社会的基盤の整備を進めて、各地域の経済を高度成熟段階に離陸せしめることが肝要である。つまり、大規模な技術革新の導入によって各企業の活動の受け皿としての経済構造を効率的に変革せしめることである。この大使命を果たし得る第1候補として「アジア高速道路網配備構想」が浮上してくるのである。このような大規模プロジェクト創設の目的関数つまり開発・発展理念は「東アジア諸民族の長期的な幸福の実現」、「積和された幸福の最大化」ということになる。

4) 課題設定

それでは、「東北アジア諸国（共同体）の長期的発展可能性」という標題のもとで、各論として何をどこまで取り纏めるか（展望するか）の見通しをたてておこう。ここで共同体とは「いずれ将来はヨーロッパのＥＣのような経済的「共同体」として」という希望がこめられたものである。

まず、2. 各論の2. 1)として「現代の東アジア型職業倫理への儒教主義の影響」を展望し2. 2)として「現代における「市場経済化」政策の基礎理論としての古典派経済学～特に、自由主義的職業倫理～」を取り纏めることを企図する。

2. 現代の東アジア型職業倫理への儒教主義の影響

前項で、Calvinismと石門心学とに端的に示されるProtestantismと儒教との職業倫理の驚くほどの原理論的類同性が明確になってきたのであるが、しかし現在の世界経済の中での経営倫理、ブルーカラーの職業倫理、より本源的には各民族に及ぼしたそれぞれの影響にはかなりの差があると

いってまず間違いないと判断できる。そこで、本項では儒教全体についてのオーソドックスな展望を試みるのではなく、職業倫理（経営倫理ももちろん含む）に影響を与えた点だけに絞って、その地下水の源流を辿ることにする。かくすることによって、われわれ自身われわれの精神の依って来る所の歴史的認識を明確にすることができる、また欧米人に日本人の、東洋人の潜在的優秀性の認識の機会と素材を提供できることにもなるのである。

明確に意図された形で漢学、儒学を習わなくても江戸時代、明治時代にわたって寺小屋で「読み書き算盤」を習ながら「修身」めいたことを教わってきたというだけでも、近代日本の出発点において文盲率ゼロに近い、裾野の広い優秀なブルーカラーの供給体制を整えることに非常に寄与したといえよう。これが日本の資本主義化に最も貢献してきたかもしれない。

しかし、ここではもう少し明確な形で、経営者、管理者に職業倫理を植え付けるに寄与した学問について究明を試みよう。それは幕府の支配階層養成のための官学としての「朱子学」、在野の庶民向けの「石門心学」、幕末および明治時代以降の近代日本での渋沢栄一等による実業倫理、等である。まず、これら、特に石門心学への影響の流れを遡ってみよう。

石門心学は石田梅巣、柴田鳩翁等によるものであるが、彼等に影響を与えたのは陽明学であり、これは南宋の陸象山にその思想の源をあおぎ、明の王陽明によってはじめられた儒学の一派であるが、江戸幕府の正統学たる朱子学とあいいれず、山鹿素行、伊藤仁斎、荻生徂徠らの古学とともに幕藩支配者から抑圧されたりもしている。この陸象山は朱子の二元論に反対して、心すなわち理という一元論をたて独自な学説を展開したわけで朱子学派とはいえないのであるが、宋代での新儒教（道学ともいわれる）の一大特色である、哲学的な「理」、「氣」、「性」などの用語による一種の宇宙生成論を説く点は共通しており、これは道教の影響といえる。

さらに、陽明学、朱子学とともに道家（道教）の完成者、孟子の思想を強く受け入れているのである。この孟子（372-289 B.C.）は道家と儒家との違いはあれ、孔子（551-479 B.C.）の影響を受けていることは当然である。結局、東洋思想的一大源流は孔子の儒教、儒学からということになるのである。

それでは以下、順に、儒家の思想、道家の思想、朱子学の要点、陽明学、石門心学、近代日本の実業倫理に分けて簡単に要旨を捉えてみよう。

中国思想の全体的特色： まず第1に、中国における思想はギリシャ哲学におけるような「理論的知」ではなく常に「実践的知」に向かっての探究であったという点に特色がある。「家族から天下国家にいたる、さまざまな社会集団のあり方、こうした集団のなかにおける個人のあり方」（[6] p.391）の探究が中心課題であった。

第2に、実践的知ということに密接に関連するのであるが、常に文人官僚階級に、意図的かどうかは別として、その職業倫理を提供しつづけてきたという点があげられる。この意味で中国のあらゆる時代のあらゆる思想が現代の経営就業倫理に直結するといえよう。

第3に、中国のほとんどの社会思想は、道教は少し別として、哲学でもなく、宗教でもなくまさに德育・経世の倫理思想なのである。儒教といつても仏教のような倫理思想ではない。ただし道教はこのような倫理思想と民間信仰との結合体である。

儒家の思想体系： 儒家の經典は、四書五經、すなわち『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』の四書と『易經』、『詩經』、『書經』、『礼記』、『春秋』の五經であり、この五經は孔子以前の著作であり、かつ『大学』と『中庸』はもともと『礼記』に含まれていたものを宋代に取り出して四書の構成要素としたものである。また、五經に『樂記』を加えて六經といわれる場合もある。これらのうち孔子の思想を最

もよく表わしているのは『論語』であり、かつ『大學』（孔子の高弟の曾子の作といわれている）である。

『論語』での要旨： 孔子は復古主義的な立場をとり、「仁」を最も重視している。「仁」とは、人間の内面的なもので、親愛、慈愛、すなわち道徳性をそなえた愛である（[2] p. 247）。孔子の思想のもう1つの核は「礼」であり、これは人間の外面向的な、古代より受け継がれてきている、慣習法としての慣習・儀礼・法律・制度等の理念型（慣行そのままではなく）をさす。この「礼」を「仁」によって基礎づけているところが孔子の思想の核心である。孔子はこの「礼」の体系によって「仁」としての「道徳」と現実の世界としての「政治」とを媒介させることを一大実践理念とした（[6] p. 395）。

この点を『大学』によって敷衍してみよう。『大学』の内容は目標としての三綱領（明徳を明らかにすること、民を新たにすること、至善に止まること）と、実行内容の八条目（格物・致知・誠意・正心・修身・斎家・治国・平天下）とからなり立つ（[7] p. 490）。要約すると「修己治人」（わが身の徳をみがき、それによって人を治める）ということであり、学問の究極の目的を⑧「天下を平らかにすること」におき、そのためには⑦「国を治める」、⑥「家をととのえる」、⑤「身を修める」、④「心を正しくする」、③「意を誠にする」、②「知を發揮する」、①「物の道理をきわめる」の七段階を設け、政策的な処方としては①の「物の道理をきわめる」ことから進めてゆくわけである（[3] p. 364）。このように、修己（①から⑤まで）はそれ自体が目的ではなく、治人（⑥から⑧まで）を予測した修己でなければならないというのが儒学の根本思想である。

道家の思想： 孔子の仁の思想の理想主義的立場と礼の思想の現実主義的立場との間にあって後継者たちは力点をどこにおくかでかなり異った主張をすることになるのである。孟子は性善説に基づいての道徳による政治、王道を提唱する。

すなわち、孔子の理想主義的側面を発展させる（[6] p.395）。王道とは人民のための政治であり、「国家において人民が最も重要であり、君主は重要ではない」などという過激な人民中心主義を打ち出し、中国における革命思想に強力な根拠を与えた（[5] p.236）。

ここで性善説とは人は「学ばなくても善を知り、考えなくても善をおこなう、万人にそなわった能力」つまり「良知良能」の特性を具備しているという説である。この良知の説が朱子学や陽明学によって哲学的に深く究明すべく引き継がれてゆくのである（[6] p.396）。

新儒教（道学）の思想：秦帝国（221-202 B.C.）の滅亡とともに、春秋時代（770～403 B.C.）の末期（506-403 B.C.）から戦国時代（403-221 B.C.）にかけて一斉に開花した諸子百家の論争、活躍も消滅する。これは、人民が賢者を選ぶという民主制を基礎にしながら結局は官僚制支配と癒着する君主独裁制の思想に帰着してしまう墨家の思想と、一方厳格な法治主義を主張して国家主義の立場をとり秦帝国の政策に深くコミットしていた法家の思想とがともに秦の滅亡とともに消滅したことにもよる。

これ以降、漢代（前漢 202 B.C. - 8 A.C.、後漢 25-220 A.C.）には「訓詁学」が主流で唐代（618-907 A.C.）にいたってもこの傾向が続き「漢唐の注疏の学」といわれている。また、漢末から晋代（西晋 265-316 A.C.、東晋 317-420 A.C.）にかけては反儒教的な老莊思想が広まり、老莊の哲学による經書の注釈書も書かれた。

しかし、宋代（（北）宋 960-1127、南宋 1138-1279 A.C.）に至り、訓詁学への反省から新しい儒教が登場する。これが宋学=朱子学である。秦の滅亡（221 B.C.）から朱子による宋学の大成（1171 A.C.）まで1392年が経過して、ここに孔孟を中心としての諸子百家の思想が装いも新たに別の形で再び登場するのである。

朱子学の要旨：儒道2家の2000年にわたって主張された「本体論」は雑多ではあった

が一貫して一致している点は物質的本体を立てて天地万物の生成を説いた点である。天地万物は「氣」によって成っているが、万物を正しくあらしめるものは「理」である（[13] p.561）。このような物質的「氣」によって万物を説明するゆき方は唯物論であり漢民族に共通した思想である。

北宋の周惇頤および程顥と程頤の兄弟の三人によって北宋理学が形成され、南宋の朱子がこれを受け継ぎ大成させる。朱子は「四書」を制定し、『四書集註』を著しており、これは彼の名を不朽ならしめると同時にこれより以後儒教を学ぶ者の必読の書となっている。また、この宋学には道教の影響がみられ、孟子に思想的な根拠をおくところがあるので特徴の1つである。

朱子は理と氣との理氣二元論に立っている。「理」は形而上の「道」で生物の「本」であり、「氣」は形而下の「器」で生物の「具」である」という説である。人の生まるるや、必ずこの「理」をうけてそのうちに「性」を有し、また必ずこの「氣」をうけてそのうちに「形」を有するとしている（[12] p.370）。

理想主義・精神主義的な朱子は特に「理」に重い価値を与えて「氣ないし一氣」の上位におき唯理論の方向へ一步を進めたが、結局理氣二元論にとどまってしまった。この「理」とは自然界の理（自然法則）も人間界の理（道徳規範）もともに同一の理であり、この理を窮め知ることによって事物の本体、人間の本性が明らかになり（格物致知）、かくて精神の修養も論理の実践もできるとして（[13] p.561）、前述の『大學』の中の八条目の①→⑧の論理に継がれるのである。

陽明学=陸・王の学=心学の思想：

朱子とともに南宋学界の双璧であった陸象山（1139-1192）は理氣二元論を説く朱子とは意見を異にした。すなわち、朱子は経験・問学・敬をたっとんで実践を重視し、一方陸象山（陸子）は直覚・徳性・静をたっとんで諦悟を重んじた（[12] p.370）。最も大きな違いは朱子が理氣二元論を説くのに対して「宇宙は自己の心、自己の

心は宇宙」という心即理の一元論を唱えた。

これを受け、明代（1368－1644）最高の儒学者・思想家であった王陽明（1472－1529）は、当時国家公認の学、朱子学の理気二元論をしりぞけて、万物の理は心に内在するという一元論的立場をとった。この面で陸子の系統をひくが、さらに実践を重んじ、その心の本体を「善をこのみ悪をにくむ道徳的感情と一体の「良知」とし、これが行為と別個に働くとき悪を生じ、これが一々の事物について（格物）正しい状態で行為と一致するところに人間本来の姿をみるという「知行合一」を説いている。心を中心とする点で「心学」とも呼ばれている」（[15] p. 113）。この学派は、のちに右派と左派とにわかれ、特に左派は「自己の心を絶対とし、人間平等を説き、熱烈な行動と簡明な実践で多くの庶民をとらえたが、やがて心学横流といわれる弊を生じた（[18] p. 122 前半）。

王陽明についての重要なエピソードを記しておく。それは彼が少年時代に朱子学の師から一本一草にも理があるといわれ、庭の竹を切って見つめ続けたが得るところがなく、以後朱子学を信用しなくなったといわれていることである（[15] p. 113）。ここに、理気二元論の本質的な問題点が見出されよう。

日本における朱子学： 江戸時代に藤原惺窓の京学派がおこり、その門弟の林羅山がそれを封建神学として位置づけ、発展せしめる。その内容は「大極説から陰陽五行を導き、その相生相克から万物を説明するという手法がとられ、自然と人間との完全な一致が自然法的な秩序として展開されてゆく。しかもその秩序の発見がもっぱら特敬静座、あるいは慎問慎思の思弁的な態度で求められるのが特色であった」（[4] p. 394）。しかし、この思弁的な観念論に対して、伊藤仁斎、荻生徂徠らの古学派から痛烈な反撃を受けたのである。

朱子学は、「仏教が彼岸的であるのに対してきわめて現世的な道徳の規範たる性格をもっていた

ので、その本来の目的を貫くためには禅僧の手から独立させねばならないという課題をもっていた。藤原惺窓や林羅山などが朱子学を禅宗寺院から救い出し、これを仏教から清めるために排仏論を展開したのはそのためであった。

朱子学が現実主義的な態度をとりながら仏教と対立し、新しい支配者と結びついてゆくのである。林羅山は武家諸法度を考えるということで江戸幕府と強い結びつきをなしとげるのである。羅山の学問が幕府の正学となり、封建神学としての態勢を整えていく」（[3] p. 364）。

藤原惺窓、林羅山の系統は幕府の官学となり、山崎闇斎、木下順庵らの派は野にあって盛況であった。また水戸の彰考館を中心に神道を基調とした朱子学が行なわれ、のちに水戸学と呼称されるようになった。羅山・闇斎らのあとに貝原益軒、望鳩巣らがでて国文をもって朱子学を紹介した（[13] p. 561）。

また、江戸中期以後、朱子学派に対して伊藤仁斎、荻生徂徎らの古学派が起こって朱子学派を批判し、朱子学派はこれに圧倒されたが、「寛政異学の禁」（1970（寛政2）年）によって幕府の官学として再興が企図され、封建制維持の精神的支柱として権威づけられた。幕末には山崎闇斎の崎門派や水戸学派から多くの革新的志士を出していることは注目すべきであろう。いずれにしても、朱子学は幕府の正統学となることにより、わが国の精神・道徳面に大きな影響を与えることになったといえよう。

日本における陽明学： 陽明学は江戸中期中江藤樹によって日本に伝えられ、人間の内面的な心の修養と実践窮行を重んじた。藤樹は良知を信じ、知行合一を説き、徳行くの第1には「孝」をあげて、みずからも老母に孝養を尽くした。藤樹の高弟に熊沢蕃山、淵岡山があり、蕃山は藤樹とさほど変わらないが、藤樹よりも日本精神と政治経済の実際をくわしく述べている。

陽明学は江戸幕府の正統学たる朱子学とあいいれば、古学とともに幕藩支配者から抑圧されたり

もしたが、理論よりも実践を重んじる庶民的な学風のためもあって、有為な人材を多く輩出した。すなわち三輪執斎、中根東里、佐藤一斎らがあり、この一斎の門下には、佐久間象山、吉田松陰などの俊傑が輩出している（[15] p. 360）。また大阪で乱を起こした大塩平八郎（1793－1837）も著名である。

古学派の思想：朱子学、陽明学の理論を批判し、直接、孔子・孟子の真義をきわめ、それを実生活の規範として実行に移すことを学問の根本とした学派であり、山鹿素行、伊藤仁斎、荻生徂徠らの学者を輩出している。学派のうち勢力のあったのは仁斎で、『論語』、『孟子』などの原典によって儒学本来の意味を捉えようとし、一方徂徠は政治の根本は個人の修養ではなく社会の制度にありとし、古いことば、古典に記された制度の理解の必要を説いた。仁斎の学派は堀川学派（古義学派）、徂徎のそれは護園学派（古文辞学派）と呼ばれた。元禄から享保時代に全盛があり、かつ国学の誕生と発展に影響を与えていている（[17] p. 63）。

この古学派の思想は朱子学のように高踏派的でなく上述の徂徎の「政治の根本、主眼は個人の修養ではなく社会の制度にあり」という正しい実定法的な捉え方が出来るように脱皮できているのである。つまり、朱子学の自然法的な概念の世界から実定法定概念へと正しく推移しているのである（[3] p. 365）。

この徂徎の思想についてもう少し検討を続けてみよう。彼は「林羅山以来の硬直化した形而上学的朱子学の方法を批判し、古典に関する研究を深めて儒教の教學的性格を統治の学に転換した、つまり古聖人のつくった封建制を理想の王道樂土と考え、「土に居つく」という封建制本来のあり方から離れた武士には尚武節儉をすすめ、「人返し」などの方法で脱農化＝都市拡大を防ぎ、かつ商業の発達を抑制し、武士と農民との結合関係を強める封建制再強化の方法を提唱した。このように発想方法としては、朱子学の觀念的論理主義を

超えて、事実にそくして政策をたてる政治的方策を確立したのである」（[19] pp. 399-400）。

しかし、徂徎の思想は保守的であり、とりわけ商業の発展を抑制してまでも封建体制を堅持する方策を健策したところに限界がある。

石門心学の思想：陽明学（心学）の流れをくむ学派であり、享保年間（1716-35）京都の石田梅巌が儒学・神道・仏教などの長所をとり人間の本性を追求し、日常生活上の道徳をわかりやすく説いた庶民的道徳思想である。梅巌は「人間を本来の姿で把握するのが性であり、その性が具体的に現われたものが心であるとし、心はその境遇や環境に応じて活動するものであるから、武士なら武士の道、農民なら農民の道、町人なら町人の道として具現され、各人の身分に安じ、現在の境遇に満足すべきことを説いている。商業に従事した梅巌は特に正直・信約・堪忍を中心とし、経済と道徳の一致を説き、商業の必要を強調し、その功利を肯定した」（[18] p. 122 後半、ただし傍点は本稿筆著）。

門人には手島堵庵、中沢道二、柴田鳩翁等があり、江戸に下り参前舎を設立した中沢道二是老中松平定信（1787-93）の信頼を受け、幕府役人や諸大名にも心学を普及させた。また柴田鳩翁は話し言葉、たくみな話術でもってこの派の教學を説き布教につとめ成果をあげたことで有名である。

いずれにしても、この庶民的なこの学派が日本の精神史上、日常の道徳観念の養成に果たした役割は極めて大きいといえる。このように、徂徎にみられる「上からの功利的（国益というキー。ワードに私利を吸収する）殖産興業思想」と石門心学のような「下からそれに呼応する禁欲的勤労思想」とは、日本の経済思想の2側面であると捉えることができる（[19] p. 400）。

このようにして石門心学は近代日本の出発点における職業倫理として多大な役割を果たしたのである。この点に関して大石泰彦〔8〕（p. 77）では「ひとつの思想が真にある時代の指導原理とな

り得るためには、高尚なことを極めてきちんと高尚な人が言うだけでは殆ど無意味なのである。それが高踏的であることを自ら止め、通俗化され、庶民のものにならなくてはならない。ここが肝心であり、思想は庶民化されて始めて時代を社会を動かすことができるるのである。この意味で石門心学について言うと石田梅巌よりも、柴田鳩翁のほうがはるかに意味があるようと考えるわけである」と言われている。つまり、全文話し言葉で書かれて貢献度が高かったといえよう。

(後編は次回掲載)

参考文献

- [1] . 山田雄三、 “経済計画”、 [30] II、 pp. 266-270.
- [2] . 宇野精一、 “孔子”、 [32] 10、 pp. 246-7.
- [3] . 奈良本辰也、 “儒学”、 [32] 14、 pp. 363-364.
- [4] . 奈良本辰也、 “朱子学”、 [32] 14、 pp. 393-394.
- [5] . 三石善吉、 “孟子”、 [33] 8、 p. 236.
- [6] . 山田慶児、 “中国の社会思想”、 [31] III、 pp. 391-399.
- [7] . 有田和夫、 “大学”、 [33] 5、 p. 490.
- [8] . 大石泰彦、 “勤儉貯蓄の精神構造”、 「生活経済学会会報」、第1巻、生活経済学会、1986. 3、 pp. 74-88.
- [9] . 大石泰彦、 “都市住民の経済倫理の光と蔭－日本の場合－～日本都市住民の経済倫理観分 析～”、 「都市セマウル運動研究論文集」第3輯・1981(セマウル運動研究会編)、 pp. 185 -195.
- [10] . Yasuhiko Oishi、 “Culture and Region : Prolegomena,” PAPERS of the RSA (Regional Science Association)、 Vol. 56、 1985 、 –The Eighth Pacific R.S. Conference, Tokyo, 1983 –、 pp. 1-3.
- [11] . “自立経済圏めざすソ連・極東地区～気分は反中央～”、 「日本経済新聞」 2. 5. 6 (日) (11).
- [12] . 福井康順、長瀬誠、“儒教”、 [32] 4、 pp. 368-371.
- [13] . 鎌田重雄、“朱子学”、 [33] 4、 p. 561.
- [14] . 三石善吉、“陸象山”、 [33] 8、 p. 412.
- [15] . 有田和夫、“王陽明”、 [33] 2、 p. 113.
- [16] . 円治健蔵、“陽明学”、 [33] 8、 p. 360.
- [17] . 村上直、“古学派”、 [33] 4、 p. 63.
- [18] . 佐々木望、三石善吉、“心学”、 [33] 5、 p. 122.
- [19] . 長幸男、“日本の経済思想”、 [31] 、 pp. 399-411.
- [20] . 中山伊知郎編、『経済学大辞典』(I、II、III)、東洋経済、昭和30年12月25日。
- [21] . 熊谷尚夫・篠原三代平編、『経済学大辞典(第2版)』(I、II、III)、東洋経済、昭和55年9月30日。
- [22] . 『世界大百科辞典』(1、…、35)、平凡社、1972. 4. 25.
- [23] . 『原色現代新百科事典』(1、…、8)、学研、1968. 2. 1.
- [24] . 『現代用語の基礎知識'87』、自由国民社、昭和62年1月1日。